

夜間中学外国人生徒との交流による近畿大学生の学び

高橋 朋子

1 はじめに

「夜間中学」と聞いてその学校生活や生徒の様子を思い浮かべることができる日本人はどのくらいいるだろう。2019年現在、日本には33校の夜間中学が存在し、そこでは多くの外国人生徒が日本語を学習している。彼らの多くは10代後半から20代で、学齢期を過ぎて来日し、就労している。そして就労のかたわら日本語を学ぶために夜間中学に通っているのである。筆者が勤務する近畿大学がある東大阪市には、夜間中学が3校設置されているが、その存在は広く認識されておらず、学生にその存在を知っているかどうかを問うと、ある授業の受講生約80名のうち挙手したものはわずか2名であった。

筆者は、2018年より東大阪市にある長栄夜間中学をフィールドとして外国人生徒の教育について研究調査を続けているが、そのなかで外国人生徒と同世代の日本人との交流が限定的であることを懸念していた。彼らは日本社会で生活しているにもかかわらず、日本人との接触の機会がほとんどない。また、2018年より近畿大学の国際学部において日本語教員養成課程の授業を担当しているが、学生とのかかわりの中で払拭したいと考えていることが2つあった。1つ目は、彼らが持つステレオタイプの「日本語学習者」のイメージ、すなわち「アニメやドラマが好きで、来日後は、東京や広島を訪れたり、休みの日には難波やユニバーサルスタジオに出かけたりして、日本の生活をエンジョイする若者」像である。そのような恵まれた環境にいる日本語学習者ばかりではないからである。2つ目はネィティブイズムである。これは「ある地域に先着し、権力を持った人々の理想化した言語使用をモデルとする考え方」（飯野 2017）をいう。授業後に提出する学生のフィードバックシートには一部ではあるが、「（外国人は）正しい日本語を使うべき」、「外国人の日本語はわかりにくい」といったコメントが散見されており、多文化多言語共生社会に向けて「やさしい日本語」¹（庵 2016）なども推進されるなか、そのような意識を持ったまま、学生が社会に出ることに危惧を抱いていた。そこで両者の交流を企画したのである。本論は、そのようにして実現した夜間中学で日本語を学ぶ生徒と近畿大学生との交流について報告し、それを通して近畿大学生はどのような学びを得たのかについて考察することを目的としている。

2 夜間中学とは

夜間中学とは、戦後の混乱期の中で、生活困窮などの理由から昼間に就労または家事手伝い等を余儀なくされた学齢生徒に義務教育の機会を提供することを目的として、昭和 20 年代初頭に設けられたものである。しかし、現在では、義務教育未修了の学齢超過者や、外国人等で日本語の学習を希望する者を中心に教育を行っている（文部科学省 2019）。その歴史や経緯は、浅野（2014）に詳しい。夜間中学に通う生徒の内訳を見ると、外国人生徒が全体の約 8 割を占めており、日本人は 19% にとどまっている。また、外国人生徒の国籍の内訳をみると、中国、ネパール、韓国朝鮮、ベトナム、フィリピン、タイ、インド、台湾、ブラジルと多様化している。その年齢層も 10 代から 70 代まで幅広く、10 代、20 代が最も多い（文部科学省 2017）。今、夜間中学は前述した本来の目的を超えて外国人生徒の日本語教育の場となっている。

次に、東大阪市長栄夜間中学²について述べる。2018 年には 102 名の生徒が在籍している。国籍を見ると、ベトナムが 30 人で最も多く、次いで中国の 26 人、ネパールの 15 人、日本人 12 名と続く。年齢は 20～29 歳が 35 名、10～19 歳が 15 名となっており、全国の傾向と同じように若い層が多い。外国人生徒は日本語能力に応じて 3 つのクラスに分けられている。17 時 10 分から始まる授業は 1 日 4 時間あり、「表現」（日本語）、「民族」、「歴史」、「音楽」、「体育」などを学ぶ。彼らの学校生活や学びについては高橋（2019a）に詳細な事例がある。給食や清掃などのほかに、遠足や運動会といった行事もあり、昼間の中学と活動内容はほぼ変わらない。違うのは、ほとんどの学習者が昼間の仕事を終えてから、学校に駆け込んでくることである。

3 交流活動の報告

3.1 国際学部の日本語教員養成課程

近畿大学の国際学部では、1 年間の留学を終えて帰国した 3, 4 年生を対象に日本語教師養成課程プログラムを開講している。必修科目「日本語教授法 1」、「日本語教授法 2」、「日本語教育基礎実習」、「日本語学」とその他の科目³をあわせ、合計 26 単位を修得した学生に日本語教員養成課程の修了証明書が交付される。筆者が担当しているのは必修科目 4 科目である。

留学先で出会う各国の友人に日本語を教えたり、自分たち以上に日本のアニメやドラマに詳しい人々と出会ったりするなかで、外国人に日本語を教えることに興味関心を持つ学生は多い。また、帰国後も交換留学生と交流したり、大学の日本語クラスを受講する留学生に宿題を教えたりして、日本語教師を将来の選択肢に入れる学生も増加している。2018 年度の受講生ではそのうち 3 名が、大学を休学し、それぞれタイ、フィリピン、ベトナム

へ日本語教師として派遣されている（2019年8月現在）。

3.2 交流の概要

交流の概要は以下のとおりである。

表1 交流の概要

日時	2019年1月25日（月）15:00～16:30
場所	近畿大学18号館201教室
交流参加者	近畿大学生：「日本語学」受講生51名（男子：8名、女子：43名） 長栄夜間中学生：13名 + 引率教員3名
事前準備	近畿大学生は、1月18日の授業時に、8つのグループに分かれ、交流内容を企画した。自己紹介→インタビュー→アクティビティ（坊主めくり、トランプ、習字、けんだま、人間知恵の輪など）とした。アクティビティの内容はグループによって異なる。
交流内容	15:00－夜間中学生の紹介 15:05－外国人生徒3名のスピーチ（フィリピン、ネパール、中国） 15:20－夜間中学生が日本人学生のグループへ入る それぞれのグループで自由に活動 15:50－近大キャンパスツアー 最後に好きな場所でグループ写真を撮ってくる 16:15－夜間中学生 退室

参加者は、「日本語学」を受講する近畿大学3年生であり、1年次後期から1年間の留学を経験している。留学先は、専攻によりアメリカ、韓国、台湾、中国と異なっている。夜間中学生の参加生徒は13名で、国籍と年齢は表2のとおりである。いずれも夜間中学の教員の呼びかけに応じて参加した。

事前準備として、近畿大学生は、グループに分かれ、どのような活動をするのかについて話し合っている。インタビューでは、何をどのように、またどのような日本語を使って話すかについて、適切なテーマや相手のレベルに合わせた日本語表現を準備した。つまり、自己紹介時の相手の日本語をよく聞いて、その生徒に適切だと思うレベルの表現を選べるようにしたのである。例えば、好きな日本料理を聞きたい場合、上級⁴話者には「日本料理の中でどんな料理がいちばん好きですか」、中級話者には「日本料理が好きですか」「何が好きですか」、初級話者には「日本の食べ物おいしいですか」「何をよく食べますか」のようなパターンをグループで作成した。

表2 夜間中学生徒の内訳

国籍	人数	年齢	来日目的
日本	3名（男性2名、女性1名）	70代	就労
ネパール	3名（男性1名、女性2名）	10代	
フィリピン	2名（女性2名）	10代、30代	国際結婚、家族滞在
中国	4名（男性3名、女性1名）	40代、60代	国際結婚、家族滞在
韓国	1名（男性1名）	60代	

交流当日は、近畿大学生6～7名のグループに夜間中学生徒が1～2名入る形で新たなグループとした。近大生の各グループはあらかじめキャラクターカードを持っており、中学の生徒は筆者が持つ9枚のキャラクターカードから1枚を引き、同じキャラクターのグループに参加することとした。例えば、フィリピンの女性が引いたカードを見て「あっ、ポケモンです！」と大声をあげると、ポケモンカードを持っているグループが彼女を「こっちこっち」と拍手で招きいれるという簡単なやり方であったが、すでに生徒たちは自分たちが歓迎されていることを感じ、グループの座っている場所へ走っていく姿が見られた。

各グループで活動を進めたが、あちらこちらから笑い声や驚きの声、拍手などがあがり立ち上がって写真を撮ったりしていた。アクティビティが終わると、キャンパスツアーのために教室を出て行った。夜間中学生からは「大学って大きい」（フィリピン）、「広くてきれい」（ネパール）、「大学に来れる日が来るとは思わなかった」（日本人）などの感想が聞かれた。また、アカデミックシアター（図書館）の棚に並べられている各国語の教材の中のヒンドゥー語の本を手に取り、「これ、読めます」とネパール人が読み始めた姿を見て、近畿大学生が驚く場面もあった。このツアーの最後に、どこかで写真を撮って筆者に送るというタスクが課されており、それらの写真をグループ内で送り合う姿も見られた。



写真1：グループ写真①



写真2：グループ写真②

4 データの分析方法

交流後、近畿大学生は交流活動を通じて考えたこと、感じたことをコメントシート（A 4-1 枚）に記入して授業内に提出した。その際、口頭にて「コメントのいくつかを報告書に記載することがある」と伝え、成績には関係ないこと、強制ではなく、報告書などへの記載を望まないものは提出しなくてよいことを説明した。回収率は 100% である。夜間中学生については、交流後に担任の A 先生に感想を伝え、それをまとめたものをもらった。このようにして収集したデータを KJ 法（川喜多 1997）におけるグループ分けの方法を用いてカテゴリー化した。手順は、以下のとおりである。まず学生の記述を 1 つの意味を含む文章ごとにカード化する（ラベルづくり）、次に、類似しているラベルを収集し（小グループ編成）、小グループを作成する。さらに、それぞれのグループにその特徴を表す名称をつける（表札づくり）。それらを繰り返しながら、徐々に大グループへと抽象度を上げる（大グループ編成）。KJ 法では、この後、各グループの関係性を図式化する必要があるが、本論は実践報告のため、この大グループまでの過程を援用して学びのカテゴリーとすることとした。彼らの学びを図式化し、詳細なストーリー化については稿を改めたい。

ここで考察の軸となる「学び」について確認しておく。佐藤（2014）は「学び」を、「対象」、「他者」、「自己」という 3 つの出会いとの対話による実践と捉えており、この 3 者は相互に関連していて切り離すことはできないという。「対象」と出会い、世界を知る。「他者」と出会い、仲間をつくる。「自己」に向きあい、自分を作るという連関した社会実践である。言い換えれば、学びとは実践を通して獲得される世界、仲間、自分づくりの過程といえる。

一方、学びはその場ですぐに可視化したり、文字化したりするなど表現可能なものばかりではない。学びが世界、仲間、自分づくりの過程とすれば、時間を経て醸成されていくもののほうが多いだろう（高橋 2019b）。交流後すぐのコメントだけを切り取って学びを考察することは、彼らの学びの全容を解明したことにはならない。しかし、多様な人々との接触が、日々同世代で同専攻の友人と同じ授業を受けるという同質的な環境で大学生活を送る学生に少なからずインパクトを与えたのは確かである。その一端を分析しておくことは、今後の多文化共生社会のありようやそこに生きる大学生への啓発を考えるうえで有益であると考ええる。

5 結果と考察

学生のコメンを 4 の手順で分析した結果、多様な社会との接触、日本語教員を目指すものとしての気づき、キャリアパスへの繋がりという 3 つのカテゴリーが生成された。以

下、順に述べていきたい。なお、文中に出てくる近畿大学生のコメントは、個人の特定を避けるために、「数字＋性別」（M 男性、F 女性）で記してある。例えば、「1 F」は「学生1で女性」を示している。

5.1 多様な社会との接触

ここでいう多様な社会とは重層的な意味を持つ。幅広い年齢や世代、多様な国や言語、そして社会的環境と様々な側面から多様性に触れた学生は、その発見をことばで表現している。

① 狭い生活世界からの脱却

自分の生活世界が思った以上に狭いことを実感した学生が多い。日本の物価が高いというネパールの女子生徒の声を聞いて、1 F は、「ずっとアメリカ、オーストラリア、日本という発展国でしか生活していないので、これが一般的だと思っていた」という。「（フィリピン人が）直接きれいな水が飲める衛生的な国だと驚いているのを見て驚いた」（10F）と経済格差を目の当たりにしている。

また、国だけでなく、日本国内の現状に驚いたものもある。18F は「本当に新鮮だった。外国人だけでなく、戦争で学ぶことができず今学校に通っている方も同じチームになって、直接会って話すということは想像を超えて違うものだった」というように、外国人より日本人生徒の存在に言及したコメントも多い。夜間中学については、37F が「存在も知らなかった」といい、6 F は「日本人が通っていることに驚いた。日本人は中学校までは自動的に卒業できると思っていたから。戦争や病気で改めて学校に通う人がいると気づいた」、35F は「食べるものがあるだけで幸せ」という日本人生徒のコメントに「貴重な話を聞いた」と述べ、いずれも自分たちの生活とはやや離れている日本社会の不可視化な側面を受け入れている。「大学に入ったのは初めてで来れると思ってなかったというネパールの人の話を聞いて、大学に来ることが当たり前だと思っていた自分に気づいた」（17F）というコメントもあった。

② 多様な国と言語

日頃、インターネットなどで多くの情報を収集していても、ネパールの人々との関わりがなければネパールについて検索することはあまりないだろう。27F は「ネパールについて何も知らなかったが、食べ物や気温など初めて知ったことばかり」、13F は「ネパール語とヒンドゥー語が似ていて読んでくれた、発音が同じらしい」、28F は「ネパールには電車がなくバスで移動するから、大阪に来てびっくりしたって言っていました。このように一生に行動したり、話したりする中で今まで知らなかった文化や知識に直接触れることで、多くのことを学べる楽しさを知った」とそれぞれ知らない国について知ること、理解

することの面白さや重要性を一番に挙げ、交流の意義を実感している。また「みんな全く違う理由で違う国から来ていたが日本語を学びたいとか、もう一度勉強したいという強い思いは共通していた」(38F)と多様な違いのなかにも共通部分があることを認識している学生もいた。

③ 幅広い年齢層との接触

幅広い年齢層に言及した学生も多い。「若い人が来ると思ってたが、年上の方も来られて緊張したが、明るくてフレンドリーな人ばかり。自己紹介の時から仲良くなれたらいいなと思っていた」(30F)、夜間中学の生徒たちが集まって談笑する姿を見て、「10代から70代までの人が一緒に勉強するってどんな感じだろう？」(22F)というコメントもあった。また年齢差、特に高齢の生徒に配慮したものも多く、「年上の学習者にゆっくり話し過ぎてプライドを傷つけないか悩んだ」(15F)、「お年の召した方との交流でどのように接すれば失礼がないか、敬意を示せるか、今まで考えたことのなかったことをたくさん考えて交流をした」(9F)と述べている。核家族化が進む日本では高齢者と同じテーブルに座って話をする機会も少ない。まして外国人高齢者とあればなおさらである。学生にとっては言葉遣いやマナーに配慮する良い機会であったといえよう。次にあげる学生のように、年齢の高い生徒から逆に刺激を受けた学生もいた。「70歳で日本語を学ぶために夜間中学に通う中国の方を見て「俺は何をやった！」と恥ずかしくなった」(32M)。

5.2 日本語教員を目指すものとしての気づき

① 日本語学習者のステレオタイプからの脱却

1の「はじめに」で述べたように、近畿大学生がイメージしている「日本語学習者」は、大学キャンパスにいる交換留学生の存在なども手伝って、「アニメなどをきっかけに日本語を学び始めた若者」というものが多い。それがこの出会いをきっかけに見方が変容している。3Fは「日本にいる人はみな『日本が好きだから』来たと思っていた。家族や仕事など様々な理由があると知った」と述べ、「仕事をしに来た」というネパールの男子生徒のことを「がんばってほしい」と励ます。「『日本で生きていくため』に日本語を学んでいるネパール人を見て生まれた国と違う国で生きていくことの厳しさがうかがえた」という12Fは、軽い気持ちで日本語学習の目的を聞いたことを後悔したという。

また、国際結婚のために来日してまだ50日程度という中国人の女性について「韓国人の旦那さんとGoogle翻訳を使って会話しているそう。大変そう」と書いた54Fは、国際結婚で来日するものが必ずしも日本語が話せるとは限らないと知った。「中国の方はほとんど話せなかった。しかしよく考えると将来日本語を教える立場になったときこのレベルの人を教えることもあるのかもしれない」(31F)、「日本にいる外国人はみな少しは日

本語を話せるという前提で考えるのをやめよう」(31F)は、外国人労働者や学齢途中の年少者教育に関わるものには当然の前提になるだろう。

② 日本語学習者と話すということ

日本語教員養成課程を受講している学生だけあって、日本語を教えるという立場からコメントを述べているものが多い。学習者のレベルを見て質問ができるように事前準備したものの、そのもっとも簡単な文章すら使えないこともあり、学生は悩み、奮闘したようだ。コメントはさらに2つに大別される。1つは学習者の多様な日本語との接触について、もう1つは教えるという意義についてである。まず、1つ目から見ていこう。「普段何気なく使っている日本語の意味を聞かれたときにすぐ答えられなかったり、うまく説明できなかったりと日本語を教える難しさに気づいた」という技術的な難しさを述べたものもある。さらに、「日本語のレベルを瞬時に見極めて話を調節することの大事さがわかった」(11F)、「発音とイントネーションに気を付けて話した」(13F)、「どういえば伝わるのか、わかりやすいか」(14M)、「簡単な言い方をしたつもりでももっと簡単に説明してあげないとわからない、私が話すやさしい日本語は全然やさしくなかった」(19F)、「相手の表情を見てジェスチャーを加え、簡単な日本語で話すと意思疎通ができるという発見があった」(29M)など、予定調和的な日本人同士の実習しか体験したことのない学生は、交流そのものが新鮮である一方、もどかしさや困難を感じたと思われる。21Mは、「留学以来ことばが通じないもどかしさを感じた」と振り返っている。

2つ目の日本語を教えるという意義については次のようなコメントがみられた。「文法は正確ではなくても心と心で会話するというような感じがしてとてもいい経験だった」(40F)、「通じないながらも日本語のことばを理解してもらえた時の喜びが体験できた」(43F)、「年齢がばらばらでも日本語がペラペラじゃなくても、話もできるし、アクティビティもできて楽しめることがわかった」(48F)、「自分勝手に話をすすめるのではなく、相手に寄り添って話を聞いてあげる大切さを感じた」(29M)などである。これらは教授法のテキストを読むだけでは実感をもって学べない、まさしく他者とともなう交流の原点であり、日本語教員にとって最も重要な視点であろう。

5.3 キャリアパスへの繋がり

近畿大学生は、就職活動のために企業説明会やインターンシップの説明会などにも参加し始めた時期でもあり、夜間中学の生徒が話す夢や目標に自分のキャリアパスを重ねて考えるものも多かった。コメントには、困惑、葛藤、悩みに加え、刺激を受けてエンパワーされる様子も観察された。

① 「学びたい」の意味の自覚

夜間中学生の真剣な学びの姿勢やことばに感銘を受けたものもいる。いくつか見てみよう。

「中国人の男性が『勉強は光だ』というのを聞いて、自分の境遇がありがたいと思った。何かを始めるのに年齢は関係ない」(10F)、「いちばん胸を打たれたのは、夜間中学の生徒が日本語を学ぶことを楽しんでいることだ」(34F)、「国際結婚のフィリピン人は、生活で学ぶことのできないことばや漢字の読み書き、ほかの生徒との交流もあって入学して本当によかったと言っていた」(46F)、「語学力や関心もばらばらで様々な背景を持った生徒たちなのに、皆日本語に対する意識はとても高く、年齢やタイミングなどもかわらず、ひたすらに勉強している姿が好感を持てた」(46F)、「すごく話すのがうまくて勉強は「やる気」だと言っていた」(20F)などのように、「学び」に向かう態度に感銘を受け、そのことについて言及している。中国の男性がアクティビティの習字で「学ぶことは命」と書いた際、そのグループにいた学生が全員スマートフォンを出して写真を撮っていたのが興味深い。

② 内省と葛藤

また、夜間中学生の日本語学習や日本での生活を、自分の過去の1年間の留学体験に投影し、内省する学生が目立った。『『生きていくため』日本語を勉強していると言っている姿を見たら、自分は本当に留学したといえるのか」(46F)、「(貧しい国を助けたいというフィリピンの女性生徒のスピーチを聞いて)涙が出そうになった。夢の目標に向かって頑張る姿や日本に来てからのつらい気持ちを考えると、大学のプログラムで友達と留学した自分と比較することさえ失礼だと感じた」(18F)、「私たちは果たして留学したといえるのか、恥ずかしい」(30F)と留学体験をやや批判的に振り返るコメントが多くみられた。

また、キャリア志向については、「〇〇ちゃん(フィリピン)はまだ18歳なのに、医者になって貧しい人を助けるという将来のビジョンをしっかりと追って、自分がどうなりたいのか、今、何をがんばっているのかははっきりしていた。私は就職活動も控えているのに、まったく将来が見えていない」(45F)という焦りや、『『英語も日本語もしゃべれるのだから夢いっぱいだね』と言われて自分の描いている夢は胸を張って言えることなのか戸惑った」(34F)という困惑もあった。いずれも他者の経験や語りを通して自分自身の経験の価値を批判的に捉え、再評価しているといえる。

③ 刺激とエンパワーメント

「生徒の目がとてもまっすぐで話しているだけで私のほうが見習わないといけないことがたくさんあると感じた」(34F)、「夜間中学の生徒さんはみな学習の意欲が強い。吸収できるものはすべて吸収するといった姿勢がとても印象に残った」(40F)が示すように、多くの刺激を受けている。「大学に入って初めて韓国語を勉強したときのことを思い出し

た。頑張っている様子を見て心を打たれた」(24F) というように、自らが経験した困難を重ねるもの、「小中学校で不登校になり、実社会になったときに読み書きがあまりできなかった日本人生徒から教育の大切さを教えてもらった」(20F) というように教育の重要性を認識したものもいる。

「スピーチを聞いて応援してあげたい気持ちになった」(19F)、「日本語を学んでフィリピンでお医者さんになりたい人の夢を支えたい。私が日本語を教えたい」(5F) というように学習を支援したいと考えるものや「アルバイトでスタッフやお客さんがほとんど外国の方で伝わらなくてしんどいと思うことが多いけど、これからは優しく接したい」(26F) というように外国人との接触を考え直すものもいた。「あなたもがんばってと鼓舞してくれているように感じた」(36F)、「今までで一番有意義な時間だった」(35F)、「働きながら勉強して、あれほどに話せるまでかなりの努力をしたのだろう。私も自分に負けずにやりたいことに集中して目標達成できるようにがんばりたい」(44M) というようにエンパワーされたものも多い。

このような多くの「気づき」は、社会をどうまなざすかにつながっている。「一番困っていることを聞くと『言語』だと言っていた。日本語を学びたくても学ぶ環境を探すことはとても難しいことだ。日本の課題だ」(21M)、「大学の存在が彼らにとって遠くて壁を感じてしまうものだ」と知って考えさせられた」(17F)、「夜中の生徒さんが日本の社会に経済的にも教育的にも溶け込めるような努力を私たちがする必要がある」(1F) など日本の学校システムや外国人を受け入れていくうえでの課題を感じた記述や、「次は私たちが夜間中学を訪問する機会がほしい」、「夜間中学の授業を見に行きたい」(42F) と交流の積み重ねの重要性に気づいたコメントも見られた。

以上、「対象と出会い、世界を知る。他者と出会い、仲間をつくる。自己に向きあい、自分を作る」という学びのプロセスを、学生がどのように経験し、何をどのように考えたかをカテゴリーごとに述べてきた。メジロー(永井 2004)は、成人学習の本質的な意味の1つに「自己省察的学習」があると述べている。これは、自分の持つ前提条件、過程、判断基準を意識に昇らせ、強力に批判することを意味するという。大学生らは、夜間中学生との交流を通して自分のこれまでの経験を批判的に見つめ、そこに新たな意味付与をしたといえるのではないだろうか。

6 おわりに

本論では、夜間中学生と近畿大学生との交流を通して、学生が得た学びを考察した。国の経済状況や社会環境、個人が持つ資本の格差に起因する視点や立ち位置の違いはあるが、大学生は、夜間中学生の学びの深さや重さの違いを肌で感じ、驚き、感心し、内省

し、その思いを表現しようとしたことは明らかである。多岐にわたる学生のコメントは一見ばらばらなようであり、その根幹には共通した喜びが感じられる。「違い」を知ること、振り返って自分を知ることである。今後、彼らの学びはどのように醸成され、変容していくのだろうか。一方で、交流の課題も見えた。時間や回数が限定的であること、授業内の交流であったことだ。今後は学生が主体的に、また夜間中学との往還をしながらより豊かな関係性を構築できるようにしていきたい。

最後になるが、「異質な他者との対話と協働による問題解決と新たな文化創造が求められる多様性の時代」(関口 2008)⁵をどのように生きていくのか問われている。それを考える一助になれば幸いである。

注

1. 「やさしい日本語」とは日本で生活している外国人が公文書などを「易しく」理解できるように、「優しい」気持ちで書き換えた日本語のことを指し(庵 2016)、「外国の人がもっと日本語を勉強すべきではないか」という意見に対して、外国人の現状により寄り添おうとする用語である。
2. 2019年3月、長栄夜間中学は市の教育編成により、布施中学夜間学級に統合されている。
3. 詳しくは近畿大学国際学部 HP を参照されたい。
4. この際の日本語レベルは、JLPT などに基づいたものではなく、自己紹介時に学生が判断し、評価する大まかなレベルのことである。
5. ここでいう「多様性」は、持続可能で公正な社会の実現を目指し多様な人々に機会を平等に開いて、より多くの人々が自らの「潜在的達成能力 (capability)」を開花させ、それぞれの仕方での社会参加の可能性を高められる「社会内・個人内の多様な文化と潜在能力を活かす時代」という意味で使われている(関口 2008)。

参考文献

- 浅野慎一 (2014)「戦後日本における夜間中学の卵生と確立：1947-1955 年」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』7 (2), 157-176.
- 飯野公一 (2017)「外国人留学生の受入れとサステナブル社会の実現」宮崎里司・杉野俊子編著『グローバル化と言語政策—サステナブルな共生社会・言語教育の構築に向けて』135-150. 明石書店
- 庵 功雄 (2016)『やさしい日本語——多文化共生社会へ』岩波新書
- 川喜田二郎 (1970)『続・発想法—KJ 法の展開と応用』中公新書

- 近畿大学国際学部 <https://www.kindai.ac.jp/international-studies/> (2019 年 8 月 30 日アクセス)
- 文部科学省 (2017) 『平成 29 年度夜間中学などに関する実態調査』 http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2017/11/07/1357982_03.pdf (2019 年 5 月 30 日アクセス)
- 文部科学省 (2019) 「夜間中学の設置推進・充実について」
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/yakan/index.htm (2019 年 5 月 30 日アクセス)
- 佐藤 学 (2014) 「学びにおけるコミュニケーションの構造 対話的实践による学びの共同体へ」『日本コミュニケーション学会』 42, 7 - 13.
- 関口知子 (2008) 「越境家族の子どもたち：新移住者第二世代の言語とアイデンティティ」『南山短期大学紀要』 36, 75-101.
- 高橋朋子 (2019a) 「学習者の多様な学びを支える日本語教育」『CAJLE』 カナダ日本語教育振興会 https://www.cajle.info/wp-content/uploads/2019/09/35_CAJLE2019Proceedings_Takahashi_Tomoko_Final.pdf. (2019 年 10 月 10 日アクセス)
- 高橋朋子 (2019b) 「留学の学びの多様な継続性 - 留学経験者の比喻生成課題、インタビューを中心に - 」『平成 30 年度学内研究助成金 21 世紀教育開発奨励金（教育推進研究助成金）による研究報告資料 グローバル人材育成を目指す留学プログラムの構築にむけて—近畿大学生の学び』 13-23. 近畿大学
- 永井健夫 (2004) 「認識変容としての成人の学習：J. Mezirow の学習論の検討」『東京大学教育学部紀要』 29, 331 - 339.

本研究は、科学研究費基盤研究（C）18K00728 の助成を受けたものです。